

キャベツの傾きを抑える 苗の深植え定植

東北農業研究センターでは、震災復興事業の一つとして津波に被災した宮城県沿岸部において、稲作と野菜作を組み合わせた経営モデルの現地実証を行っております。稲作経営への野菜作の導入により、雇用労働力の分散化、収益増による経営の安定化等が期待されています。

畑作園芸研究領域

山本岳彦

YAMAMOTO, Takehiko



《キャベツ栽培における結球部の傾きの問題》

近年需要が増加している加工業務用キャベツでは、定植、中耕、薬剤散布、収穫を機械で効率的に行う機械化体系の確立が進められています。特に、重量野菜であるキャベツの収穫作業は労働負荷が大きく、機械化が望まれています。近年、実用性を向上させた高性能なキャベツ収穫機（写真）が市販されていますが、その導入には解決しなければならない問題もあります。機械による収穫では、キャベツの結球部の傾きが大きいと、作業性が低下することや病害の増加等を引き起こす可能性があるからです。

けします（図1）。

浅植え（セルが土壌から露出）や標準的な定植の深さでは、結球部の傾きの比較的大きい株が収穫期に一定の割合で含まれていますが、深植え定植では多くの株で傾きを抑えることができました（図2）。深植え定植ではより深い層における根系発達がよく、軸も相対的に太い傾向があり、これらが結球の傾き制御に関わっていると考えられました。

今後、結球部の傾き抑制メカニズムの解明、および異なる品種や異なる地域への適応性等について検討する予定です。



写真／キャベツの機械収穫の様子

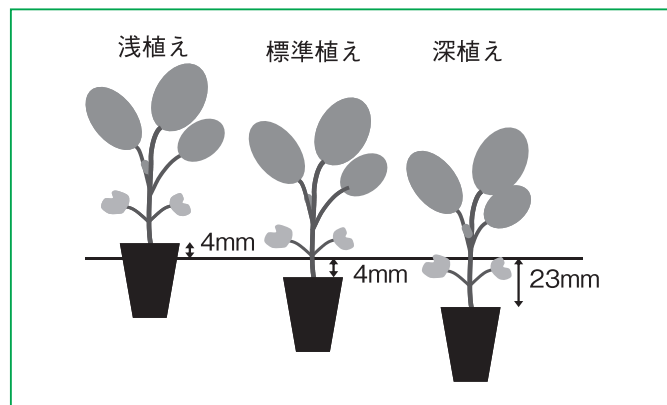


図1／キャベツセル苗の定植深さ

《キャベツの深植え定植》

我々は、栽培技術面から収穫期における結球部の傾きを抑制する方法を検討し、キャベツのセル苗（セルトレイに培地を入れてハウス内で育てた苗）を深めに定植することで、収穫時の結球の傾きが抑えられることを明らかにしました。キャベツ定植では、移植機を用いて、セル苗に軽く土がかぶる程度に植付けするのが一般的ですが、深植え定植では移植機を用いて、セル表面に2cm以上土がかぶるように深めに植付

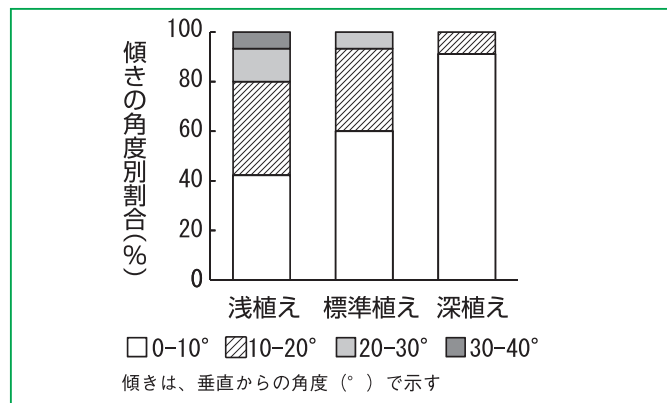


図2／キャベツ結球部の傾き（収穫期）